



城将戦隊

バズッデバンジャー

いいなり戦隊ヒロイン！
仲間の目の前で、泡姫プレイ！
ご奉仕恥辱



時は、現代——。

妖怪の総大将ぬらりひょん率いる悪死牙流^{あしがる}と名乗る妖魔の軍団が現れ、世の中を混乱の渦に叩き込んでいた。

その妖魔軍団に立ち向かうべく、結成されたのは——。

我らが、城将戦隊バズッテンジャー^{じょうしょうせんたい}だった！

バズッテンジャーは、戦乱の世にて武勲を挙げた武将達の“末裔”が結成した五人の戦隊で——。各地に拠点の城を築き上げた“悪死牙流の妖魔城”を陥落させるべく戦っていた。

そして、今まさに——。六大將軍の一人“マダーコ將軍”がいる城へ侵攻し、攻め落とそうとしていたのだった。

だが、そもそもバズッテンジャーは五人の戦隊と言っても、一人一人が武将の強大なパワーを持っており——。妖魔城を攻め入るに至って、五芒星の陣形で各五方向から進撃するのが定石となっていた。

そんな中、バズッテンジャーの紅一点、バズホワイトこと源真姫宝^{みなもとまきほ}もまた、女性でありながら、たった一人で敵陣に進撃していた。

バズホワイトは、白兎をモチーフとした兜のヘルメットマスクと、全身を覆う戦隊スーツに武将の甲冑を着けている出立ちで——。手に持つ名刀ミカヅキを華麗かつ可憐に振り回していた。

そんなバズホワイトに、千人を越える悪死牙流の戦闘員が襲い掛かっていた。

しかし、バズホワイトは脱兎の如く逃げる事はせず——。ダッシュで、それを蹴散らして行った。

そして、戦隊メンバー全員が落ち合うであろう——。マダーコ將軍がいる本丸の玉座にバズホワイトはやって来た。

「によほほほほ…よく来た！バズホワイト！いや、源真姫宝！」

そこには、この妖魔城の主、マダーコ将軍がいた。

マダーコ将軍は、人型の妖魔でクトゥルフ神話に登場する蛸のような顔と身体つきをしており、二本の腕と二本の脚の他に、何本かの蛸のような足の触手が生えている。

そんなマダーコ将軍は、バズッテンジャーに本丸まで侵攻されているにも拘らず、涼しげな態度で玉座に腰を据えていた。

「流石、私♪ 一番乗りしちゃったみたいね♪」

「にょほほほほ…ざーんねん！バズホワイト、お前は最下位だよ」

「はぁ？なに言っちゃってしてくれてる訳え？まさか、私以外の戦隊メンバーが、あんたに倒されたと言っても言うの？」

「にょほほほほ…そのまさかだ！」

マダーコ将軍が発言した、その“まさか”が天井から降りて来た。

ガガガァ…ン！！！！

「！！」

バズホワイトが観た景色は――。四人の戦隊メンバーである鷲のバズレッド、龍のバズブルー、虎のバズイエロー、牛のバズブラックが、武装した甲冑がボロボロになった状態で、バズホワイトを囲む壁に磔にされていた。

「み、みんなぁ！い、生きてるの？」

磔にされ、微動だにしない四人の戦隊メンバーの姿に——。自分と同様ヘルメットマスクを着けているせいもあり、バズホワイトの真姫宝は、その生死が瞬時には分からず問いかけた。

「ああ…生きてるとも…」

「こんなザマだがな…」

「すまん…俺たちなんて、二人がかりだったのに…」

「面目ない…」

「ちょっと、あんた達、何やってるのよ！」

四人の戦隊メンバーは、各々、真姫宝を見下ろしながら生存安否を応えた。

「どうする？バズホワイト、お前、一人でこの俺様と戦うか？」

「当然じゃない！このバズホワイト！敵を目の前におめおめと引き下がるもんですか！」

バズホワイトは、名刀ミカヅキを手に“飛兎の舞”で構えた。

「流石、名だたる武将の末裔…だが、この状況を分かってないようだから、あえて教えてやる…！ここに磔にされて生かしているのは、人質だぞ！！」

「人質ですってえ？」

正義の味方である戦隊ヒロインのバズホワイトには、人質を取る戦法があることなど考えもしない事だった。

「そうだ！…コイツらは、人質のために生かしている…ここまで言えば、これが、どういう意味か分かるだろ？」

この時、バズホワイトこと真姫宝には、マダーコの言っている意味が分からなかった――。

『仲間のメンバーがマダーコと対戦したのは、一人もしくは二人ずつだったかも知れないけど、あの四人を相手に磔にするほどの力を持っているのに…なんで自分一人に対して、こんな人質という戦法を取ってくるの？』

真姫宝は、そんな疑問を感じずにはいられなかった。

『“天下統一パワー”を手になっている事がバレている？』

バズホワイトこと源真姫宝には、戦隊メンバーも知らない秘策があった。彼女は、スーパーアルティメットフォームに変身出来る“天下統一パワー”を密かに手に入れていた。

そんな事を思考しながら、一つの結論にたどり着いた真姫宝は、マダーコに問いかけた。

「要求は、何よ…」

「によほほほ…まずは、その物騒な武装を解いて、その可愛い顔を見せてもらおうか♪」

「はぁ？…で、その要求をのんだら、大人しく仲間を解放してくれるって事？」

真姫宝は、マダーコのその言葉に——。まだバズホワイトの変身を解かないままの姿で、マダーコの要求を確認した。

「によほほ…それは、手始めの要求だ。お前に与える要求に俺様が満足したら、他の三人を解放してやる。当然、お前の命も保証にしてやる…！」

「はぁ？まさか、私の身体が目的？」

マダーコに主導権を握られている空気を変えるべく、真姫宝は冗談のつもりで言ってみた。さらに補足すれば、これがお茶の間に流れるテレビアニメだったならば、「そんな事するかぁ〜！！」とギャグテイストな返しが来るのが“お決まり”なのだが——。

「によほほ…これは嬉しい！以心伝心だなぁ！そうだ！俺様は、お前の豊満なその肉体を好きにしたいんだよ！！」

「はぁ？」

「前々から考えていたよ…その甲冑に覆われていても、その隠しきれていない、体当たりされたらイチコロの武器になりそうなほどに飛び出ている、その豊満な胸を揉みしだきたい〜ってなぁ♪」

真姫宝は唖然とした。命を掛けた戦で、こんな不埒な事を考える妖魔がいる事に——。すると、鷲のバズレッドこと“最上”が真姫宝に向かって叫んだ。

「真姫宝！いや、バズホワイト！俺たちの事は構わないから、もし何か秘策があ

るなら、そいつをやっちまってくれ！」

『もお！なに言い出すのよ！感づかれるじゃない…！』

その時だった——。

ブッシュウウウウウウウ……！！！！

鷲のモチーフをしたバズレッドの頭が、血しぶきと共に宙へと舞い上がった。

そして、バズホワイトの目の前に、バズレッドの打首が転がって来た。

「きっ…！貴様あ！」

「によほほほほ…流石、こんな光景を観ても、悲鳴を挙げないとは…腹の座った女武将さんだ♪」

横並びになっていたバズレッド以外の戦隊メンバーたちは、その光景に声を失っていた。

だが唯一、声を荒げた真姫宝もまた、バズホワイトのヘルメットマスクのおかげで——。動揺を隠しきれない表情を、マダーコに見せずにいられた。

「バズホワイト！奴らの首を、よく見ろ！奴らの首には特殊な首輪を着けてある…お前が俺様の要求を呑まないというのなら、残っている奴らも打首だ！」

そう言い終えるとマダーコは、突然、身体に生えている無数の触手をバズホワイトへ向かって、飛ばしてきた——。

シュバババッバッバババッバ…！！！！

その余りに素早い動きに、バズホワイトは何も出来ないまま、身体に巻き付かれてしまった。

「なっ？！」

「ほおら、さっさと変身を解除しな…秘策があるのか無いのか知ったこっちゃないが…俺様は、この四人と同様、いつでもお前なんか倒すこと出来るんだ！さもなくば、また一人打首にするだけだぞ」

『身体が動かない…これじゃあ、アルティメットフォームにもなれやしないわ…それに、あんなに速攻打首にされたら助ける事も出来そうにない…』

真姫宝は、身動きすら出来ない状況で、他の戦隊メンバーの敗北理由を身体で実感しながらも、次の一手を模索した。

「ほお～ら！よく見ろ…バズレッドの骸をよお～♪」

身体を触手で拘束されたままに、それを見せつけられた真姫宝は――。バズホワイトのマスクの中で、その無惨な光景に目をそらしていた。

「早く俺様の要求を実行しないと、他の三人も、こうなるぞ！！」

この時の真姫宝は、当然ではあるが、マダーコの思考が理解できなかった――。

『私の胸を揉みたいのならば、この触手を使って力づくで、それを実行する事も出来るだろうに…だけど、それをしないのは、なぜ？』

真姫宝は“そんな疑問、を持ちながらも、“それ、を問う事はしなかった。

「わ、分かったわ…変身を解除するから、この触手を解いて…」

真姫宝は“マダーコの要求、に応えようと、“自分の要求、を口にした。

すると、マダーコは、真姫宝を転ばないよう気を遣っているかのような優しい動きで床に立たせると——。バズホホワイトに絡みつけていた触手を解いた。

この時、真姫宝はマダーコの動きで確信した。

“マダーコは、私に惚れている、と——。

これまで幾多の自分に言い寄って来た男性たちを振り続けてきた真姫宝は、妖魔のマダーコさえも自分の虜になってしまっている事を確信した。

『それなら、マダーコが言うように要求さえ呑めば…自分と三人の命は保証される！それに、私に惚れてるって事は…いわば、私のいいなり！ちょっと癪だけど…胸ぐらい、好きに揉ませてあげるわ！』

だが、その真姫宝の考えは甘かった。そんな胸を揉むだけで、治まるものではない事を——。性に対して疎い真姫宝には知る由もなかった。

ピキュウウウううう…ン

マダーコを手玉に取ってやろうと考える真姫宝は、バズホホワイトの変身を解除して、城将戦隊のユニフォーム姿でマダーコに顔を見せた。

「これで、いいかしら！でっ…次は、どうすればいいの？」

“主導権は我にあり、”と踏んだ真姫宝は、マダーコに上から目線で言った。

「それじゃあ、コイツに着替えてもらおうか♪」

マダーコがそう言って、真姫宝の戦隊ユニフォーム姿に無数の触手を飛ばして来た。

シュバババッバッバババッバ…！！！！

「なっ！何！？」

そのマダーコが放った無数の触手は、真姫宝の姿を覆い隠しながら、物凄い勢いで触手が動き回った。

「きゃあ！！ちょっとお！！何するのよお！！！」

そんなマダーコの行動に、磔されたままの戦隊メンバー三人は——。何も出来ないまま声を出すこともなく、それを見届ける事しか出来ないでいた。

「いやあ…！！やめてえ！！やめなさいったらあ！！！」

他の戦隊メンバーが聞いた事のない真姫宝の——。女らしい慌てふためいている声に、三人は同時に息を呑んだ。

そして、その無数の触手が真姫宝の身体から離れると、そこには——。

仲間である戦隊メンバーですら観た事もない、真姫宝の霞もない姿が、そこにあった。それは……



頭にバンニーガールの耳のヘアバンドを付けさせられており、首にバンニーガール特有な襟の蝶ネクタイ、そして手首にはバンニーガール特有の袖ボタンがあった。

白兎をモチーフにしたバズホワイトの真姫宝が、バンニーガールの格好をさせられているようにも思えたが――。

それは大きく異なり……胸元から太ももの付け根までが、まるっとくり抜かれた“逆バンニーの衣装”で、真姫宝は“豊満な乳房”と“大きなお尻”を全く隠せない衣装に身を包んでいた。

「きゃあ！何よ？これはあ！！？」

何も隠されていない涼しげな姿に真姫宝は、隠しきれないと分かっているにも、双方の手で胸とお尻を隠しながら――。視線を感じる男たちの眼から、逃れようとしゃがみ込んだ。

「ちょっとお！何よ！これえ！？」

「白兎のバズホワイトに、白の逆バンニー！最高お～！」

「あんた達も観ないでよ！」

真姫宝は、視線を感じる戦隊メンバー三人に向かって、注意した。

「み、観てねえよ！！」

バズブルーのヘルメットマスクを被った“伊達”が、真姫宝に顔を背ける仕草をしながらも、ガン見したまま嘘をついた。

そして、他の二人もそれを真似るように、有らぬ方へ“ヘルメットマスクの顔”を向けながら、真姫宝の姿に釘付けになっていた。

そんな三人だったが――。肌を露出している真姫宝の“谷間”を三人が見るのは、初めてではなかった。

それは、戦隊メンバー全員でハロウィンパーティーを行った際…真姫宝が白バニーガールにコスプレして浮かれていた時、観ていたのだった。そんな事もあり、真姫宝は“乳モロ出し下半身マル出しの逆バニー衣装”には当然抵抗を感じていたが、バニーガールの耳など装飾については抵抗がなかった。

すると、またマダーコの嬉しそうな笑い声が聞こえて来た。

「によほほほほ！サラシやフンドシかと思っていたが、こんなオシャレなランジェリーをお着けになっていたとは！それも、Tバックパンティーとはなあ♪」

「はあ？ちょっ！ちょっと、それって？！」

真姫宝が“マダーコの手を持っている物”へ目をやると、それは――。真姫宝が“先程まで身に着けていた”と思われる“白い花の刺繍が付いた高級ブラジャー”と、“お揃いのTバックパンティー”だった。

「どお〜れ！くんか♪くんか♪」

マダーコは、鼻があると思われる顔の場所で、“真姫宝が履いていた白のパンティー”を嗅ぎ始めた。

「はあ？！ちょ、ちょっと！それって私のもでしょ！や、やめなさいよ！！」

「バズホワイト、いや源真姫宝！お前…さては、生理前か？ちょっと臭いがキツイみたいだな！」

「なっ…なに言ってるのよ！そんなの、あんたに関係ないでしょ！」

真姫宝は“それ”を否定する事なく、恥ずかしそうに顔を赤らめてマダーコに怒りの声を挙げた。

「そんな恥ずかしがる事はねえじゃねえか、人間のメス特有の匂いさ♪ さぞかし、性感帯の感度も上がってる事だろうよ♪ なぁ！お前らも、そう思うよなぁ！！」

マダーコが磔にされた戦隊メンバーに、そう言って語りかけると——。真姫宝から顔を背ける仕草をしていた三人のヘルメットが突然、真っ二つに割れた。

そして、それは……真姫宝に視線を降り注いでいた三人の顔を、露わにさせた。

「ひゃっ！！」

男のギラついた本性を見てしまった真姫宝は、思わず悲鳴にも似た声を上げてしまった。

「ちょっ！アンタたちい！！」

真姫宝は、怒りのぶつけどころを戦隊メンバーの三人に向けて、“下着の匂い”の事を無しにしたかった。

「お前らにも嗅がしてやろう♪」

マダーコはそう言って、バズイエローこと“蒲生”の顔に——。真姫宝の“陰部を包み込んでいたパンティーの生地部分”が、ちょうど“鼻を覆う”ように触手を伸ばして被らせた。



そんなバズイエロー蒲生が鼻に覆われた“真姫宝のパンティーの股の生地の匂い”を嗅いだ瞬間——。いつぞやの、どこぞの女のマンコをクンニした時に嗅いだ事のある匂いがして『生理前の感度高めなのか？』と頭に過らせると、バズイエロー蒲生は股間を膨らまさざるを得なかった。

それは、一瞬の出来事で——。バズイエロー蒲生の顔に“自分のパンティーが被らされている”のを観た真姫宝は、すかさず片手で豊満な乳房を隠しながら、バズイエロー蒲生の顔から“自分が履いていたTバックパンティー”を取り上げた。

「やだぁ！もぉ！」

すると、今度は——。真姫宝の顔がすっぽり隠れてしまいそうなほどの“布面積が大きなブラジャー”を、マダーコは二つに引きちぎり…左右それぞれの“ブラ生地”をバズブルー“伊達”と、バズブラック“毛利”の顔に、ブラ紐を引っ掛けながら被らせた。

その真姫宝の“乳房が覆われていたブラ生地”は、母乳を出す甘い香りとまでは行かなかったが、母性を感じる匂いで——。バズブルー伊達たちは真姫宝に対し……高飛車なあんな性格でも戦隊メンバーの仲間として好印象な感情を持っていた事もあり、少なからず股間が反応してしまっていた。

それを観た真姫宝は、バズイエロー蒲生の時と同様に——。バズブルー伊達の顔から、半分のブラジャーを取り上げた後…バズブラック毛利の顔から、その半分を取り上げると、、、

バズブラック毛利は明らかに匂いを嗅いでいたかのような表情で、目を閉じており——。真姫宝は、すかさず、その顔面に強烈なビンタを喰らわした。

バチン！！

「もぉ！なんて事するのよぉ！」

『私の勝負下着だったのにい！また買えばいいけど、こんな引きちぎるなんてえ～！！』

説明するほどの事でもないが、ここで真姫宝が言う“勝負下着”とは、この悪死牙流との“戦においての勝負下着”という物であった。

そんな真姫宝は、奪い返したパンティーを——。“バズイエロー蒲生に匂いを嗅がれた”こともあり、履くことはせず…引きちぎられたブラジャーは“その機能を果たさない”のもあったため、それらを手に持ったまま“恥部”をどうにか隠そうとした。

「でっ！こんな格好させて何がしたいワケ？」

「にゃほほほほ！まずはお前に、この知識を与えてやる♪」

マダーコは、そう言って——。一本の触手を真姫宝の頭に巻きつけて来た。

「なっ！？」

突然、襲い掛かって来たと思われたその触手に真姫宝は——。思わず隠していた恥部から手を離して、頭に巻き付いて来た触手を掴むと、手に持っていた下着が床に落ちた。

そして、それは必然として——。豊満な乳房はこぼれ落ち、三人の戦隊メンバーも観たことがなかった真姫宝の“その大きな乳房に比例した大きめの乳輪をした乳首”がお目見えした。

そんな三人の視線も、露わになった乳房を放おったままに真姫宝は、頭に巻き付いた触手を何とかしようと——。モガけばモガくほどに、その豊満なオッパイは大きく揺れた。

そうしていると、その触手の先端が真姫宝の眉間にそっと触れてきた。

「！！！！！！？」

すると、真姫宝は大きく目を開いてから、突然、立ちくらみに襲われた感覚で、足元をフラつかせた。

「ま、マダーコ…私に何をしたの？」

目の前の、露わになった乳房に気づいた真姫宝は、それを慌てて隠しながら、マダーコを睨みつけた。

「によほほほは！お前の潜在意識に“とある知識”を植え付けてやった♪」

「知識ですってえ？」

真姫宝は、頭の中で思考を巡らせても、何の知識を植え付けられたのか、さっぱり分からなかった。

「それじゃあ、次なる準備だ♪」

マダーコはそう言って、何本かの触手を玉座の隅に飛ばした。そして、その触手がマダーコの定位置に戻ってくると——。その触手たちは、寝具ベッドのツインサイズ程度の“ビニールマット”と、浴室用だと思われる大きめの“透明度のある椅子”を持って来ていた。

そのビニールマットを観た真姫宝には、これからマダーコが何をしようとしているのか分からなかった——。だが、壁に磔られた戦隊メンバー三人の男は、そのビニールマットを観て、一目で気づいた。

ある者は行った事のある場所で使用した事があり、またある者はアダルトビデ

オの映像で観た事がある品物だった。

そして、それを観た三人の男たちは、マダーコが“これから何をしようとしているのか”察しがついていた。

「それじゃあ、始めてもらおうか♪」

【体験版】 おわり